

<牧会ミニ通信>No.15 2020. 8. 2

通院することは70歳までありませんでした。ところが、70歳過ぎてから通院生活が始まりました。13年も前のことです。日々、下痢の症状が続き、山口日赤病院で診察を受けました。「大腸憩室炎でしょう」とは、内科部長の診断です。しかし、一年後の内視鏡検査では、「S字結腸ガン」一、ステージ2～3との診断でした。

医師はにこやかに申しました。「結城さん、最近では、二人に一人がかかるガンです。心配はいりません、三日後手術です」。

近頃、医師は、検査結果を、家族にでなく、本人に直接説明する方針に変わったようです。

手術台の周りに四人の看護師さんたちがいたことまでは覚えていますが、当日のことは覚えていません。ただ、麻酔から覚めると、全身の震えがとまらなかったことだけは覚えています。

翌朝、目覚めた時、前日手術を受けた患者たち数人が、わたしの両脇に並んでいます。「朝か・・・」と、御父を仰ぎみて感謝していると、急に讚美が口をついて出てきました。

「ひとたびは死にし身も 主によりて今生きぬ、みさかえの輝きに 罪の雲消えにけり昼となく夜となく、主の愛に守られて、いつか主に結ばれつ世には無き交わりよ」・「主の受けぬこころみも 主の知らぬ悲しみも、うつしよにあらじかし、いずこにも御跡、みあと見ゆ、昼となく夜となく 主は共にましませば、癒やされぬ病いなく、幸ならぬまがも無し」一、一人ほくそ笑んで讚美していました。手術を受ける前も後も、さしたる心の動揺もなく、平安の内に手術は終わりました。「ここまで信仰がわが身に受肉したか」と思われて、感謝と驚きとを新たにしました。

「与えられたいのち、許されてあるいのち、後は、おのが身をもって神の栄光を顕すべし」との主の仰せでした。

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城 晋次